

青年期女子における情緒的つながりについて：  
母親,友人を対象として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 純子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4757">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4757</a>

# 青年期女子における情緒的つながりについて

## —母親, 友人を対象として—

山本純子

臨床心理学専攻研修生

### 要約

本研究では母親, 友人との間で感じられるアタッチメントや, 一体感, 被受容感などを包括的に捉え「情緒的つながり感」と定義し, つながり感尺度を作成し, 青年期女子における母親および友人との「情緒的つながり感」について検討した。因子分析の結果, 母親とのつながり感尺度は母親による自立の承認, 理想化された母親への同一化, 母親との一体感, 母親による無条件の受容, 母親への同類視・親近感の5因子が, 友人とのつながり感尺度では憧れの対象としての友人への同一化, 友人関係に対する信頼・自信, 友人との相互受容感, 友人との仲間意識, 友人に対する依存の5因子が抽出された。両尺度の下位尺度間では一部を除きほとんど相関がなく, 母親との「情緒的つながり感」と友人との「情緒的つながり感」は関連性が低いことが示された。両者は質の違いがあり, 別々の意義をもつため, 青年期以降も母親, 友人との密接な関係が同時に存在しうることが示唆された。

キー・ワード: 青年期女子, chumship, 母親, 友人

### I 問題・目的

#### 1. 母子関係に関する臨床的知見

様々な発達段階において, 母子関係の重要性や母子関係が精神的健康に及ぼす影響力はよく取り上げられることである。早期の母子関係が, その後の人格発達において重要な影響力を持つことを述べた理論はいくつか挙げられる。乳幼児期の母子一体感の中で得る, 世界が信頼できるものであるというErikson (1959/1973) による基本的信頼感もその中の一つである。また, Bowlby (1969/1991) は, 初期の赤ちゃんにとって母親との関係が最も大きな影響力を持ち, 重要性を持つと述べている。Bowlby (1969/1991) は, この時期に母親との間で特定の人と人の間に形成される, 時間や空間を越えて持続する心理的な結びつきをアタッチメント (attachment) とし, 子どもは主要なアタッチメント対象との間で経験された相互作用を通じて, 自分の周りの世界やアタッチメント対象, 自己に関する心的な表象モデルであ

る, 内的作業モデルを構築していくという理論を提唱している。

母親との間で基本的信頼感やアタッチメントなどが十分に得られない場合, 何らかの疾患を発症する場合もある。黒川・上田 (1998) は, 思春期・青年期の女子に多いとされる摂食障害の原因や発症する理由として親密感を作り出す「母子関係」の問題を挙げ, 摂食障害の人々は, 幼少期に親の放任や無視などにより, 親から注目や関心, 愛情を与えられなかった疎遠な母子関係, 強制・処罰や禁止ばかりのしつけをする母子関係, 虐待をする母子関係の環境の中で育っているとしている。また, 渡辺 (2000) は, 摂食障害の背景に乳幼児期の母子相互作用の障害, 例えば乳幼児期の授乳や家庭の食卓で緊張や落ち着かない経験をしていることを挙げている。さらに, 境界例人格障害も症状の形成に母子関係が関わり, 境界例人格障害の患者には親への依存と独立欲求の葛藤が見られ, Masterson (1980/1982) は, 思春期・青年

期において、分離や自立しようとするが見捨てられるかもしれないという、再接近期での親子関係のパターンがよみがえり、分離不安が再燃するとしている。そして、この分離をめぐる問題が解決されない場合に症状が形成される。

また、病気が母子関係に与える影響としては、例えば、気管支喘息になることが養育者、特に母親との関わりに影響を及ぼす場合がある。喘息に対する親の過剰な心配や不安は、子どもに病気に対する恐怖や不安を植えつけ、子どもの喘息発作に対する予期不安が高まる。不安になり、子どもは苦しくなると親を呼び、親も過干渉になるといった密接な関係が形成され、その後の人格発達に影響を及ぼす可能性もある(荒木, 2002)。

親子関係の展開を発達心理学的な視点から捉えたものとしては“心理的離乳”(落合, 1995)に関する研究がある。落合(1995)は、親子関係の心理的距離に注目し、心理的離乳への5段階過程評価仮説を提出している。また、落合・佐藤(1996b)は、青年期を対象として、実際に親子関係の変化を検討し、心理的離乳への新たな5段階過程仮説を明らかにしている。すなわち、第1段階は「親が子を抱え込む関係・親が子と手を切る関係」、第2段階「親が外界の危険から子を守ろうとする関係」、第3段階「青年が困った時親が助けたり、励まし、支える関係」、第4段階「子が親から信頼・承認されている関係」、第5段階「親が子を頼りにする関係」である。

## 2. 母娘関係の特質

しかし、女子において言えば、「友達みたいな親子」と言われるように、母親世代が娘世代に近づく母娘関係が取り上げられる(矢幡, 2000)など、密接な同性の友人との関係だけでなく、密接な母娘関係が青年期以降も持続していることが窺える。

母娘関係を取り上げた研究は少ないが、東山(2004)は、母娘関係の結合を発達段階別に検討している。すなわち、第一段階の結合として幼児期から思春期、青年期にかけての母親との密接な

関係があり、娘が子どもを産み、母となると育児の先輩として再び結合し、さらに母親が高齢になり介護を必要とすると、母親が娘を頼りにし、再び、母と娘が結合すると述べている。

また、渡邊(2003)は、依存と独立は一次元的、対立的には位置づけられず、依存概念には否定的意味がある他者への情緒的依存と、大人に許容・肯定される依存が含まれると仮定し、後者の他者との相互理解・信頼関係に基づき、他者を心の支えとできる肯定的・情緒的結びつきを“絆”と定義して、青年期の娘・息子とその母・父との情緒的依存・絆の意識について研究をしている。その結果、依存意識と絆意識は分離されず、1つの因子として抽出され、息子より娘の方が母親との依存・絆意識が強く、母親との極めて情緒的に親密な関係があることを明らかにしている。

## 3. 青年期女子の友人関係とchumship

友人関係の理論として、Sullivan(1953/1990)のchumship理論がある。Sullivan(1953/1990)は、前思春期に「あらゆる価値において自分と同じように大切な人」である同性同年輩の友人chumとの親密な関係であるchumshipを経験すると述べており、この経験はそれ以前の人格の歪みを正常にできるとして、人格発達におけるchumship体験の重要性を述べている。

しかし、chumshipの理論は男子を対象に構築されたものであり、女子においても当てはまるのかどうかは明らかになっていない。それゆえ、女子においてchumshipと捉えられるような関係がどのように経験され、どのように発達していくのかを検討した研究は少ない。その中でも、須藤(2003)はchumship体験が男子にとっては主体性・自律性をもった自分を実感することと関連するのに対して、女子では安心感・安定感との関連がある反面、自分は他者と分立した存在であるとの感覚には繋がりにくいことを明らかにしている。そして、須藤(2003)は、女子の特徴として、相手に憧れ身近な他者をモデルとする、他者希求的体験が自分に対する安心感と関連することを示唆している。

また、須藤（2005）は、大学生・大学院生を対象に、中学・高校・大学時代の最も身近な同性同年代の友人との関係について検討し、男子と女子のchumship経験の差異を述べている。男子は、自他の違いを明確に感じ、他者との間で自分も出し、相手の側にも身を置く同一性のあり方が見られるのに対し、女子は人物を関係づけ、他者優先的なあり方を持つ傾向が高いことを明らかにしている。そして、chumship体験をしている女子における同一性の特徴として、男子とは異なり、人物関係を滞りなく落ち着かせ安定を保つという点で関係志向的であることを挙げている。

#### 4. 青年期女子における母娘関係と友人関係の関連性

このように、母子関係と友人関係の重要性はそれぞれ述べられているが、二つの関係が同時に存在することや、両方の対象との関係の重要性を述べた理論は見られない。落合・佐藤（1996b）の心理的離乳への5段階評価やBlos（1962/1971）の第二の個体化の理論では、母親中心の関係から、友人中心の関係に移っていくとされている。Bowlby（1969/1991）も、子どもが成長するにつれて母子間のアタッチメント関係は、次第にパートナーシップへと変化していくと述べている。しかし、友人との親密な関係が形成されていく一方で、密接な母親との関係が薄れることなく持続し、東山（2004）が指摘するように、生涯を通じて何らかの形で母と娘の関係は続いていくことが考えられる。

青年期においては、母親との関係から安心感や受容されている感覚、お互いが独立した存在と認識した上での一体感だけでなく、理想や親近感、支配される感覚など、様々な感覚を得ているのではないだろうか。一方、友人の間でも、安心感や受け止められている受容感、信頼されている感覚や憧れ、同類感・親近感など様々な感覚を得ているのではないだろうか。そして、例えば相手にありのままの自分を出し、受け止められているという受容感や安心感は、母親との間でも友人との

間でも実感している感覚と言えるのではないだろうか。そこで本研究では、実際に相手との関係で感じている多様な感覚の内容について検討するために、アタッチメントだけでなく、理想や親近感なども含む、より多様な感覚を包括的に捉え、これを「情緒的つながり感」として定義する。

青年期初期という、幼児期のような依存した母子関係ではなく自立した母子関係が築かれていると思われる時期にも関わらず、密接した母子関係が持続しているのはなぜなのだろうか。思春期女子の親密な友人との関係と母子関係の関連を研究した三輪（2000）は、親密な友人への不安感と安心感の両方が高いという感情は、母親に反抗している時のアンビバレントな感情と未分化な状態なのではないかと述べており、母親との間の「情緒的つながり感」と友人との間の「情緒的つながり感」とはそれぞれ独立したものではなく、両者に関連性があることを示唆している。

一方で、母親、友人それぞれの対象との「情緒的つながり感」が完全に共通しているのであれば、どちらか一方との関係が密接であればいいはずだが、実際にはしばしば母親と友人共に密接な関係が存在している。これは、母親との間でしか得られない「情緒的つながり感」、友人との間でしか得られない「情緒的つながり感」があるために、母親、友人それぞれと密接な関係を結ぶことが求められるためと考えられる。本研究においては、これらのことを踏まえ、青年期における母親との「情緒的つながり感」と友人との「情緒的つながり感」がそれぞれどのようなものであり、両者がどのように関りあっているのかを検討していくこととする。

## II 方法

### 1. 調査期間

2006年7月に質問紙を配布した。

### 2. 調査対象者

大阪樟蔭女子大学に所属する大学生157名（平均年齢：20.1歳，SD=.932）を対象に調査を行い、

記入漏れの質問紙を除いた149名を分析の対象とした。

### 3. 調査方法

質問紙を授業中に一斉に配布し、各自が回答後、所定の回収ボックスに提出してもらおうように教示を行った。

### 4. 調査内容

母親とのつながり感尺度、友人とのつながり感尺度：落合・佐藤（1996b）の親子関係尺度、落合・佐藤（1996a）の友達とのつきあい方に関する35項目、岡本・上地（1999）の親・友人イメージ尺度、徳本（2001）の心理的距離尺度の項目を参考に、安心感・信頼されている感覚・受け入れられている感覚・同一感・憧れなどの内容を問う37項目を新たに作成した。母親、友人それぞれとの「情緒的つながり感」を測定するために、同じ37項目の文中の言葉を、「母親」にしたものと「友人」にしたもの2パターンを用いて実施した。回答は、「非常にそう思う」（4点）～「全くそう思わない」（1点）の4件法で求めた。

なお、友人とのつながり感尺度に関しては回答者がchumshipを形成していることを前提とし、最も親しい同性の友人を思い浮かべて回答してもらおうように教示をした。

## III 結果と考察

### 1. 母親とのつながり感尺度の因子分析

母親に対して感じている「情緒的つながり感」にどのような側面があるのかを調べるために、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行い、解釈の可能性から5因子構造が妥当であると考えられた。そこで、因子負荷量がいずれの因子についても.35に満たない項目と複数の因子の負荷量が.35以上の項目を削除して、再度分析を行い、29項目を採択した（Table1）。

第1因子は、「私が大人であると認めてくれている」、「私のすることにはめったに反対しない」、「私のことを信頼してくれている」などの項目に負荷が高かったことから、お互いに依存し合っ

ているのではなく、母親が自立した自分を信じ認めてくれているという感覚に関する因子であると解釈できるので、「母親による自立の承認」因子と命名した。第2因子は、「母親に、好感を持ち、同じようになりたいと思う」、「母親が、自分の中にないものを持っていて、羨ましい」、「母親のようになりたいと思う」などに負荷が高かったことから、母親を理想の対象とし、母親に近づきたい、母親と同じようになりたいと感じている感覚に関する因子であると解釈できるので、「理想化された母親への同一化」因子と命名した。第3因子は、「母親との間で、連帯感を感じる」、「母親が同意してくれると安心する」、「お互いの気持ちを感じ取ることが出来る」などに負荷が高かったことから、母親をより近い存在と捉え、一体感や安心感を感じている感覚に関する因子であると解釈できるので、「母親との一体感」因子と命名した。第4因子は、「自分の考えや気持ちをはっきり言える」、「母親には、自分のありのままの姿をさらけ出せる」、「困ったことがあっても、母親に頼らず自分で何とかしようと思う（逆転項目）」などの項目に負荷が高かったことから、困っているなどありのままの姿を母親に見せ、なおかつそれが無条件で受容されていると感じている感覚に関する因子であると解釈できるので、「母親による無条件の受容」因子と命名した。第5因子は、「いろいろなことに対する考えや感じ方が似ていると思う」、「私は、母親の意見に賛成することが多い」、「母親には、色々な部分に影響された（ている）と思う」などの項目に負荷が高かったことから、母親との違いを認めながら、母親と共通部分があると安心感を感じている感覚に関する因子であると解釈できるので、「母親への同類視・親近感」因子と命名した。

信頼性検討のために、各因子が高い負荷を示した項目の得点についてChronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、 $\alpha = .89 \sim .75$ の高い値が得られた（Table1）。

Table 1 母親とのつながり感尺度の因子分析の結果（主因子法 プロマックス回転）

質問項目	I	II	III	IV	V
<第1因子 母親による自立の承認> ( $\alpha=.87$ )					
A5 私が大人であると認めてくれている	.818	-.101	-.031	-.163	-.029
A10 私のすることにはめったに反対しない	.795	-.158	-.023	-.099	.144
A29 私のことを信頼してくれている	.697	-.036	.329	-.104	-.051
A21 私の考えや意見を尊重してくれる	.673	.118	-.081	.078	.067
A36 私が自分の考えで行動してもそれを認めてくれる	.645	-.009	-.026	.027	.150
A13 私は、母親に自由を束縛されていると思う *	-.632	-.140	.219	-.185	.190
A6 ありのままの自分を受け入れてくれる	.528	.032	.030	.253	.099
A23 何かをやれという指示には反感を覚える *	-.406	-.257	-.138	.126	.103
<第2因子 理想化された母親への同一化> ( $\alpha=.89$ )					
A22 母親に、好感を持ち、同じようになりたいと思う	.170	.827	-.034	-.043	.028
A17 母親が、自分の中にはないものを持っていて、羨ましい	-.108	.799	-.093	.034	.047
A20 母親のようになりたいと思う	.102	.753	.060	.073	-.082
A25 母親が、自分がいいと思っているものを持っていて、羨ましく思う	-.130	.722	-.162	.077	.067
A35 母親に憧れの気持ちを持っている	.121	.718	.150	-.109	.006
A32 母親と、なにかにつけて、一緒に行動したいと思う	-.125	.392	.310	.010	.148
<第3因子 母親との一体感> ( $\alpha=.82$ )					
A11 母親との間で、連帯感を感じる	-.031	-.142	.803	-.018	.116
A34 母親が同意してくれると安心する	-.181	.067	.725	-.101	.048
A30 お互いの気持ちを感じ取ることが出来る	.044	.179	.615	.080	-.159
A26 私にあまり関心を持っていないように感じられる *	-.124	.265	-.579	-.121	-.076
A16 離れていても私のことを見守ってくれていると思う	.157	.098	.506	-.063	-.008
A4 母親と一緒にいると落ち着く	-.019	.292	.418	.081	.020
A37 私を本当は嫌っているんじゃないかと思うことがある *	-.308	.140	-.410	-.095	.088
<第4因子 母親による無条件の受容> ( $\alpha=.76$ )					
A18 自分の考えや気持ちを母親にはっきり言える	-.045	-.001	-.002	.903	-.125
A27 母親には、自分のありのままの姿をさらけさせる	.039	-.027	.032	.810	.105
A7 困ったことがあっても、母親に頼らずに自分で何とかしようと思う *	.152	-.122	.036	-.386	-.106
A15 私が困っていても相談にのってくれない *	-.025	-.071	-.307	-.352	-.058
<第5因子 母親への同類視・親近感> ( $\alpha=.75$ )					
A14 いろいろなことに対する考えや感じ方が似ていると思う	.142	-.019	.043	.011	.686
A2 私は、母親の意見に賛成することが多い	.127	.292	-.178	-.032	.587
A28 母親には、色々な部分に影響された（ている）と思う	-.138	-.010	.215	.053	.455
A12 母親が関心を持つことに自分も興味を持つことが多い	-.112	.300	.168	-.003	.400

\* は逆転項目

次に、各因子を構成する項目得点の合計を項目数で割って平均値を算出し、これを各因子の尺度得点とした。そして、母親とのつながり感尺度の各因子別に尺度得点の平均値と標準偏差を算出した（Table 2）。その結果、「母親との一体感」のみ平均値が3以上を示し、青年期女子の母親との

Table 2 母親とのつながり感尺度の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
母親による自立の承認	2.76	0.57
理想化された母親への同一化	2.54	0.67
母親との一体感	3.17	0.50
母親による無条件の受容	2.88	0.65
母親への同類視・親近感	2.69	0.62

「情緒的つながり感」において、他の因子に比べ「母親との一体感」をより感じていることが示唆された。

## 2. 母親とのつながり感尺度の因子間相関

次に母親とのつながり感尺度の尺度得点を用いて、因子間の相関分析を行ったところ (Table 3), 「母親による無条件の受容」と「母親への同類視・親近感」との間でやや低い正の相関 ( $r=.357$ ) であったことを除いては、いずれの因子間においても高い正の相関が見られた ( $r=.420\sim.630$ )。このことから、母親との間の「情緒的つながり感」の様々な側面は、一つ一つ独立して感じられているのではなく、深く関わりあって感じられていることが示唆された。特に、「母親との一体感」と「母親による自立の承認」で正の強い相関が見られ ( $r=.630$ )、母娘関係における依存的側面と自立・独立的側面は一次元的、あるいは対立的なものではないことが示唆された。

Table3 母親とのつながり感尺度の因子間相関の結果

	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子
I 母親による自立の承認				
II 理想化された母親への同一化	.576**			
III 母親との一体感	.630**	.607**		
IV 母親による無条件の受容	.502**	.491**	.592**	
V 母親への同類視・親近感	.420**	.621**	.502**	.357**

\*\* $p<.01$

## 3. 友人とのつながり感尺度の因子分析

友人に対して感じている「情緒的つながり感」にどのような側面があるのかを調べるために、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行い、解釈の可能性から5因子構造が妥当であると考えられた。そこで、因子負荷量がいずれの因子についても.35に満たない項目と複数の因子の負荷量が.35以上の項目を削除して再度、分析を行い22項目を採択した (Table 4)。

第1因子は、「友人のようになりたいと思う」、「友人が、自分がいいと思っているものを持っていて、羨ましく思う」、「友人が、自分の中にあるものを持っていて、羨ましい」などの項目に負荷が高かったことから、友人に憧れ、友人を理想とし、友人に近づきたい・親密になりたいという感

覚に関する因子であると解釈できるので、「憧れの対象としての友人への同一化」因子と命名した。第2因子は、「私を本当は嫌っているんじゃないかと思うことがある (逆転項目)」、「私は、友人から好かれていると思う」、「私にあまり関心を持っていないように感じられる (逆転項目)」などの項目に負荷が高かったことから、友人の好意を確信し、友人関係が揺るぎないものだという信頼や自信を感じる感覚に関する因子であると解釈できるので、「友人関係に対する信頼・自信」因子と命名した。第3因子は、「友人には、自分のありのままの姿をさらけだせる」、「ありのままの自分を受け入れてくれる」、「自分の考えや意見を友人にはっきり言える」などの項目に負荷が高かったことから、お互いが自立した存在としてありのままの姿を受容し合い、支えあっている感覚に関する因子であると解釈できるので、「友人との相互受容感」因子と命名した。第4因子は、「共通の趣味を持っている」、「友人が同意してくれると安心する」、「友人とは、いつも話がよく合う」などの項目に負荷が高かったことから、友人と共通の部分を感じ、仲間意識を持っている感覚に関する因子であると解釈できるので、「友人との仲間意識」因子と命名した。第5因子は、「私は、友人の意見に賛成することが多い」、「いつも話を最後まで聞いてくれる」などの項目に負荷が高かったことから、友人を頼りにし、少し依存的になっているという感覚に関する因子であると解釈できるので、「友人に対する依存」因子と命名した。

信頼性検討のために、各因子が高い負荷を示した項目の得点についてChronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、 $\alpha=.86\sim.67$ の高い値が得られた (Table 4)

次に、各因子を構成する項目得点の合計を項目数で割って平均値を算出し、これを各因子の尺度得点とした。そして、友人とのつながり感尺度の各因子別に尺度得点の平均値と標準偏差を算出した (Table 5) ところ、「憧れの対象としての友人への同一化」を除くすべての尺度得点の平均値が

Table 4 友人とのつながり感尺度の因子分析結果（主因子法 プロマックス回転）

質問項目	I	II	III	IV	V
＜第1因子 憧れの対象としての友人への同一化＞（ $\alpha=.86$ ）					
B20 友人のようになりたいと思う	.854	.015	-.076	-.071	.150
B25 友人が、自分がいいと思っているものを持っていて、羨ましく思う	.844	-.078	.193	.019	-.185
B17 友人が、自分の中にないものを持っていて、羨ましい	.773	-.068	.182	-.100	-.093
B22 友人に、好感を持ち、同じようになりたいと思う	.666	.080	-.159	-.003	.209
B35 友人に憧れの気持ちを持っている	.580	-.037	-.026	.173	.111
B8 友人が自分と同じ物を持っていたり、身に付けていると安心する	.544	.082	-.199	.172	-.064
＜第2因子 友人関係に対する信頼・自信＞（ $\alpha=.75$ ）					
B37 私を本当は嫌っているんじゃないかと思うことがある *	.026	-.779	-.008	.001	.101
B9 私は、友人から好かれていると思う	.116	.779	-.007	-.116	.032
B26 私にあまり関心を持っていないように感じられる *	.077	-.639	.152	-.074	-.060
B16 離れていても私のことを見守ってくれていると思う	.123	.443	.126	-.156	.143
B15 私が困っていても相談にのってくれない *	.126	-.439	-.177	-.086	.031
＜第3因子 友人との相互受容感＞（ $\alpha=.77$ ）					
B27 友人には、自分のありのままの姿をさらけだせる	.040	-.080	.778	-.026	.042
B6 ありのままの自分を受け入れてくれる	-.163	-.065	.751	-.022	.223
B18 自分の考えや気持ちを友人にはっきり言える	.135	.195	.580	-.069	-.195
B30 お互いの気持ちを感じ取ることが出来る	-.012	.118	.435	.089	.142
＜第4因子 友人との仲間意識＞（ $\alpha=.67$ ）					
B33 共通の趣味を持っている	.069	-.046	-.120	.749	-.108
B34 友人が同意してくれると安心する	.206	-.104	.177	.455	.169
B19 友人とは、いつも話がよく合う	-.009	.138	.255	.433	.003
B11 友人との間で、連帯感を感じる	-.055	.333	.091	.390	-.026
＜第5因子 友人に対する依存＞（ $\alpha=.68$ ）					
B2 私は、友人の意見に賛成することが多い	.229	-.036	-.092	.002	.605
B3 いつも話を最後まで聞いてくれる	-.101	-.009	.293	-.104	.594
B1 私が解決できないことをすぐに解決してくれる	.162	.096	.100	-.029	.453

\*は逆転項目

Table 5 友人つながり感尺度の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
憧れの対象としての友人への同一化	2.91	0.66
友人関係に対する信頼・自信	3.24	0.47
友人との相互受容感	3.30	0.54
友人との仲間意識	3.24	0.51
友人に対する依存	3.09	0.53

3以上であった。このことから、青年期女子が、友人との間で「情緒的つながり感」の様々な側面を実感していることが示唆された。

#### 4. 友人とのつながり感尺度の因子間相関

次に、次に各因子の尺度得点を用いて、因子間の相関分析を行った（Table 6）。

その結果、「憧れの対象としての友人への同一化」と「友人に対する依存」との間、「友人との相互受容感」と「友人関係に対する信頼・自信」「友人と仲間意識」「友人に対する依存」との間で高い正の相関（ $r=.407\sim.501$ ）が見られた他、一部を除いて正の相関が見られたが、概して母親とのつながり感尺度の因子間よりも相関係数の値が低かった。このことから、友人との「情緒的つながり感」の様々な側面は関わりあって感じられているものもあるが、それぞれ一つの独立した側面として感じられていることが示唆された。

Table 6 友人つながり感尺度の因子間相関の結果

	第I因子	第II因子	第III因子	第IV因子
I 憧れの対象としての友人への同一化				
II 友人関係に対する信頼・自信	.170 <sup>*</sup>			
III 友人との相互受容感	.264 <sup>***</sup>	.492 <sup>**</sup>		
IV 友人との仲間意識	.382 <sup>**</sup>	.386 <sup>**</sup>	.456 <sup>**</sup>	
V 友人に対する依存	.501 <sup>**</sup>	.247 <sup>**</sup>	.407 <sup>**</sup>	.357 <sup>**</sup>

\*\*p<.01 \*p<.05

5. 母親とのつながり感尺度と友人とのつながり感尺度の因子比較

母親とのつながり感尺度5因子と友人とのつながり感尺度5因子の尺度を構成する項目の内容を比較してみると、似通っていると思われる因子がいくつか見られた。母親とのつながり感尺度と友人とのつながり感尺度の各因子の内容を比較した結果を図示したものがFigure 1である。

まず、「理想化された母親への同一化」と「憧

れの対象としての友人への同一化」は、どちらも母親／友人を理想や憧れの対象とし、その対象に「同一化」しようとする感覚という点で共通していると思われる。

また、ありのままの姿を友人が受容していると感じている「友人との相互受容感」は、ただ受け入れられていると感じるだけでなく、友人と自分がお互いに独立した存在として捉えている要素が見られる。このことから、お互いが自立し、依存し合っていない点は「母親による自立の承認」と、また、ありのままの姿を受容されていると感じている点は「母親による無条件の受容」と似通っていると考えられる。つまり、母親の間では別々の側面として感じられている相互受容感と被受容感が、友人の間では混じり合っ一つの側面と

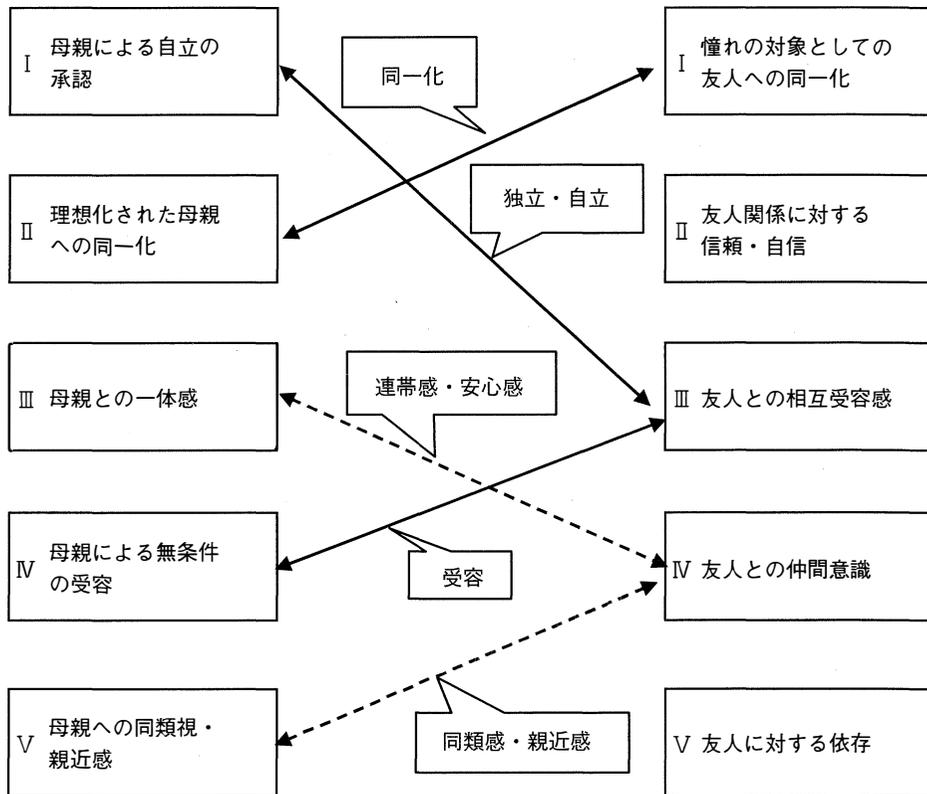


Figure 1 母親との「情緒的つながり感」と友人との「情緒的つながり感」の比較

して感じられていることが明らかとなった。

さらに、友人に自分と共通する部分を感じ、友人の行動から連帯感や安心感を得ている項目内容の「友人との仲間意識」は、連帯感や安心感を得ている部分では「母親との一体感」と、相手に自分と共通する部分を感じている部分は「母親への同類視・親近感」に似通っていると考えられる。

一方、「友人関係に対する信頼・自信」と「友人に対する依存」は、母親とのつながり感尺度の他の因子尺度と一部共通する項目があるものの、因子負荷の高い項目の構成を見ると、友人とのつながり感尺度に独自の因子であると言える。つまり、相手の好意を確信し、相手との関係に信頼・自信があるという側面と、相手を頼りにして依存しているような側面は、友人との関係特有の「情緒的つながり感」だと言える。

#### 6. 母親とのつながり感尺度と友人とのつながり感尺度の相関分析

次に、母親との「情緒的つながり感」の5因子と友人との「情緒的つながり感」の5因子において、どのような関わりが見られるかを調べるために相関分析を行った (Table 7)。その結果、「母親による無条件の受容」と「友人との相互受容感」の間に.30以上の正の相関 ( $r=.348$ ) が見られたのを除き、その他の因子同士では有意な相関ではあっても相関係数の値は.24未満と低かった。

Table 7 母親とのつながり感尺度と友人とのつながり感尺度の相関

	母親による 自立の承認	理想化された 母親への 同一化	母親との 一体感	母親による無 条件の受容	母親への 同類視・ 親近感
憧れの対象としての 友人に対する同一化	-.119	.073	-.019	-.038	.051
友人関係に対する 信頼・自信	.233**	.069	.209*	.238**	.029
友人との相互 受容感	.096	.096	.177*	.348**	-.018
友人との仲間意識	-.027	.157	.171*	.143	.150
友人に対する依存	-.112	.002	-.028	-.083	.084

\*\* $p<.01$  \* $p<.05$

このことから、母親との間で感じている「情緒的つながり感」と友人との間で感じている「情緒的つながり感」の関連性は低く、相互に独立している傾向にあることが示唆された。つまり、母親

との間で感じる「情緒的つながり感」と友人との間で感じる「情緒的つながり感」は別々のものであるため、一方の「情緒的つながり感」が高いからといって、必ずしももう一方の「情緒的つながり感」も高いとは限らない。そのため、青年期女子においても母親との情緒的つながりは友人との情緒的つながりと関わりあって続いている場合もあると言える。

## IV 総合的考察

### 1. 青年期女子の母娘関係について

母親との「情緒的つながり感」の各因子間には高い相関が見られ、母親との「情緒的つながり感」の諸側面は相互に関連性が強いことが明らかとなった。特に「母親による自立の承認」と「母親との一体感」で高い相関が見られ、依存と独立という一見正反対の側面に強い関連があり、両側面は対立的ではないことが示唆された。つまり、母親との一体感を感じていることで、独立した存在である自分に自信を持つことができ、心理的に親から自立していけるということが言える。これは、青年期の親から心理的に自立し、自己を確立していく状態と、Winnicott (1965/1977) のいう“一人でいられる能力”が形成される状態が、母親と一緒にいて、お互いが一人であるという経験という点で共通することを示していると思われる。渡邊 (2003) が青年期においても母親への依存意識と絆意識が分離されずに感じられていることを示唆する結果を得ていることと軌を一にして、母親との関係で得られる「情緒的つながり感」の各側面は関連しあっていて切り離せないと言える。

### 2. 青年期女子の友人関係とchumshipについて

母親との「情緒的つながり感」の各因子と、友人との「情緒的つながり感」の各因子を比較したところ、「友人関係に対する信頼・自信」「友人に対する依存」が、母親との「情緒的つながり感」に関するどの因子とも似通っておらず、友人関係特有の「情緒的つながり感」であることが明らかとなった。また、友人関係に対する信頼があり、

友人の受容感に“相互”という側面があることから、青年期の友人との情緒的つながりは、母親との情緒的つながりと違って、お互いが支えあう関係であると言える。Sullivan (1953/1990) は、前思春期のchumshipに関して、“親友の幸福に役に立とうとするために、一緒にいる時間が価値のある感じにするために、自分は何をすべきか”という考えを持つと言っているが、青年期の友人関係においても、この側面が前面に出ていると考えられる。

### 3. 青年期女子における母娘関係と友人関係の関連性

母親とのつながり感尺度の各因子と、友人とのつながり感尺度の各因子の項目内容を比較したところ、「理想化された母親への同一化」と「憧れの対象としての友人への同一化」、「母親による自立の承認」・「母親による無条件の受容」と「友人との相互受容感」、「母親との一体感」・「母親への同類視・親近感」と「友人との仲間意識」に類似する点が見られた。言い換えると、母親との「情緒的つながり感」と友人との「情緒的つながり感」は、相手に同一化する側面、受容されていると感じる側面、相手に支持されたり相手との連帯感を感じたりする側面で類似していると言える。

しかし、相関分析を行った結果、母親との「情緒的つながり感」と友人との「情緒的つながり感」の因子間には、各つながり感尺度の因子は、「母親による無条件の受容」と「友人との相互受容感」に低い正の相関が見られた以外は、ほとんど関連は見られなかった。このことから、母親との「情緒的つながり感」と友人との「情緒的つながり感」は別々のものであり、お互いが関連していないことが示唆された。すなわち、青年期女子においては、母親に対して求める「情緒的つながり感」が得られない場合に、友人との「情緒的つながり感」で補うことは、必ずしも生じていないと言える。本研究の結果から、母親との「情緒的つながり感」は、各因子が強く関わりあい、自立という側面も

一体感を感じていてこそ得られ、根底には「一体感」の感覚があることが示唆された。また、母親との情緒的つながりにおいて、ありのままの自分が認められ、受け入れられている感覚や、信頼され、任されている感覚などを得ていることが明らかにされた。それに対して、友人との間での「情緒的つながり感」には、根底にお互いが「対等である」という感覚があり、友人と情緒的つながりにおいて、独立した存在として認め合い、受容し合う感覚を得ているとことが明らかにされた。

以上のように、母親と友人それぞれの「情緒的つながり感」に質的な違いがあり別々の意義をもつため、青年期女子において両者の関連性が低く、密接な友人との情緒的つながりとともに、密接な母親との情緒的つながりが維持されうることが示唆された。

### 4. 今後の課題

本研究では青年期女子を対象に調査を行ったが、発達段階によって母親との関係、友人関係が変化することに伴い、「情緒的つながり感」もその様相に変動があると考えられる。そのため、対象を青年期に限定せず、発達的に見ていくことが必要だと思われる。また、青年期は自我の確立を達成するため、親との関係で依存と独立のアンビバレントな状態になると言われ、この時期の青年期心性は境界例における内的な状況と類似しているとも指摘されている(小此木,1980)。今後、境界例心性と各つながり感尺度との関連を見ていくことで、青年期女子における母親および友人との情緒的つながりが、どのように関わり合っているのかを臨床的な観点からもより深く検討できるのではないかと思われる。

<付記> 本論文は、平成18年度大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科臨床心理学専攻修士論文を抜粋しまとめなおしたものである。修士論文をまとめるにあたり、大阪樟蔭女子大学大学院の奥田亮先生、坂田浩之先生にご指導とご助言を賜りました。この場を借りて心から感謝致します。

## 文献

- 荒木佐代子 (2002) : アレルギー反応 東山紘久 (編) : 子どものこころ百科 創元社, pp416-423.
- Blos P (1962) : On adolescence. 野沢栄司訳 (1971) : 青年期の精神医学 誠心書房.
- Bowlby J (1969) : *Attachment and loss, Vol. I Attachment*. 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子訳 (1991) : 母子関係の理論。愛着行動 岩崎学術出版社.
- Erikson EH (1959) : Identity and the life cycle. 小此木啓吾訳 (1973) : 自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル 誠信書房
- 東山弘子 (2004) : 母娘関係の再結合と再々結合による「母性」と「自己性」の葛藤 佛教大学教育学部学会紀要, 3, 53-63.
- 黒川昭登・上田三枝子 (1998) : 摂食障害の心理治療 朱鷺書房.
- Masterson JF (1980) : *From Borderline Adolescent to Functioning Adult: The Test of Time*. 作田勉訳 (1982) 青年期境界例の精神療法: その治療効果と時間的経過 星和書店.
- 三輪友希恵 (2000) : 思春期女子の友人関係と母子関係の関連について—親密な関係における感情に注目して— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 47, 467-468.
- 岡本清孝・上地安昭 (1999) : 第二の個体化の過程からみた親子関係および友人関係 教育心理学研究, 47(2), 248-258.
- 小此木啓吾 (1980) : 青年の精神病理2 弘文堂.
- 落合良行 (1995) : 心理的離乳への5段階過程仮説 筑波大学心理学研究, 17, 51-59.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996a) : 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, 44(1), 55-65.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996b) : 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44(1), 11-22.
- 須藤春佳 (2003) : 前青年期の「chumship体験」に関する研究 心理臨床学研究, 20(6), 546-556.
- 須藤春佳 (2005) : 思春期・青年期における身近な同性同年輩関係—関係イメージと同一性との関連より— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 51, 232-246.
- Sullivan HS (1953) : *The Interpersonal Theory of Psychiatry*. 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鎌幹八郎訳 (1990) : 精神医学は対人関係論である みすず書房.
- 徳本祥 (2001) : 青年期における空虚感と親からの心理的分離との関連に関する研究 心理臨床学研究, 19(2), 109-118.
- 渡辺久子 (2000) : 母子臨床と世代間伝達 金剛出版.
- 渡邊恵子 (2003) : 母親と娘はなぜ親密か—青年期から成人期にわたって— 柏木恵子・高橋恵子 (編). 心理学とジェンダー: 学習と研究のために 友斐閣, pp31-36.
- Winnicott DW (1965) : *The Maturation Processes and the Facilitating Environment*. 牛島定信訳 (1977) : 情緒的発達の精神分析理論: 自我の芽生えと母なるもの 岩崎学術出版社,
- 矢幡洋 (2000) : 強すぎる母—娘関係に生じる問題 児童心理, 54(1), pp28-33.